

国際シンポジウム四

《講演録》現代インドにおける説話の伝承『子どもパンチャタントラ』の構成と内容

岩瀬 由佳

皆さん、こんにちは。

最初に、今日の発表で使用する資料二点をご紹介します。一つは、ハイデラバード、南インドで入手したこちらの『子どもパンチャタントラ』というものです。もう一つは北インドのニューデリーで入手した、やはり『パンチャタントラ』、子ども向けのリライトです。

予稿集二頁目の後半から一番下に『パンチャタントラ』についてまとめております。早口で紹介しますと、『パンチャタントラ』というのは、ある作品名のはずです。というか、そう考えられているものです。「パンチャ」というのはサンسكريットで五を表します。「タントラ」にはいろいろな意味があつて、仏教などでは秘教的な意味でも使われますが、ここではそうではなくて、単に巻号数等の「巻」に当たると捉えるのが一般的です。「五巻の書」と和訳されることもよくあります。

ただ、これ、謎の書物として、作者が分からない。作者が分からないということは年代もはっきりしない。どこで書かれたのかも分からない、という謎だらけのものです。一般的にインドでは、子ども向けの動物寓話集として考え

られています。しかし、実際に『パンチャタントラ』を繙いてみればすぐに分かることですが、所謂おとぎ話のように、動物と人間が対等に話をしたりということはありません。動物は動物の世界で動物同士話を通じますけれども、また、人間が話している言葉を時に動物が解することもありますが、人間と動物が会話をすることはないんです。ですから、動物が登場人物として多いので、動物寓話集という捉え方を一般にはされませけれども、誤解を招く表現だと思っております。

予稿集の補遺と書いたすぐ下の(一)に、主な『パンチャタントラ』伝本と中東・西欧への伝播として、インドにおける伝本を並べています。『パンチャタントラ』というオリジナルがあつたかどうか分かりません。「オリジナル現存せず」と書いていますが、『パンチャタントラ』というタイトルの後にクエスチョンマークを付けているのは理由があります。『パンチャタントラ』として知られている伝本は全てが『パンチャタントラ』というタイトルとは限らない、むしろそうではないものがより古い伝本として知られているのです。一般的には、学者の間では『パンチャタントラ』でくくっておりますけれども、私個人的には違うと思っております。ここはそういう話題の場ではないので、はしりますけれども。

一番最初に挙げた『タントラーキヤイカ』というのは、カシユミール地方に伝わる伝本で、原本はサンスクリットですが、文字はよく使われているナーガリー文字ではなく、シャラーダー文字といわれる、また別の文字で書かれています。

二つ目の『パンチャーキヤナカ』は、一一九九年にジャイナ教徒のプールナバドラという人が書いたことが分かっていて珍しい——作者、年代ともに分かっているものです。ただ、これがオリジナルでないことは文体等からも

明らかです。

次の『小本』(*Textus Semplicior*)は、一般的に『パンチャタントラ』という題が広まった基になったと考えられるもので、これこそ『パンチャタントラ』という名前で広く知れわたっている伝本です。ただ、小本とひとくくりで言っても、実は写本は一つではなくて、知られているものは二種類あります。今日の発表で扱う話の中でも、この二種類の伝本で大きく違っている点がございます。

その次の『南伝パンチャタントラ』は、南インドに流布しているものです。

次の『ヒトーパデーシャ』、これは『パンチャタントラ』を基にして、かなり書き変えられたものです。ナーラーヤナという人が書いたものでして、以上が散文作品です。

次に挙げた二作、『カターサリットサーガラ』と『ブリハットカターマンジャリー』は、いずれも韻文で、十一世紀の作品です(注…この二作品には『パンチャタントラ』が組み入れられています)。

以上が、よく知られているインドにおける『パンチャタントラ』というくくりの伝本なのですが、それぞれがどう関わっているか、全く分からないんですけれども、実は、この『パンチャタントラ』らしい作品は中東に伝わっています。いつかは分からないけれどもイランに伝わりました、それを中期イラン語に翻訳したのがブルゾイという医者さんでした。ペルシャの王様に「どうもインドには素晴らしい書物があるらしい。それを行って持ってきてくれなにか」と言われた、ブルゾイという医者さんが頑張ったものです。それを基にして、シリア語およびアラビア語に訳されたものが①(注…『カーララグとダムナグ』)と②(注…『カーララとデウムナ』)です。それぞれ別々に訳されております。

以下は大体年代も分かっているものが多いのです。アラビア語を起点として、シリア語、ギリシャ語、それからいろいろありまして、重要なのがラテン語で、ヘブライ語からラテン語に翻訳されて、そのラテン語を通していろいろな西欧諸語に翻訳されて、一般的にビドパイ寓話という名前で知られています。

それから先ほど、アラビア語と言いましたけど、②のアラビア語に関しては、これは①と異なりまして、『パンチャタントラ』の五巻にとどまらず、『マハーバーラタ』を含むさまざまなソースから話を取り込んでいることが分かっています。それから、訳したと言いましたけれども、私たちの考えるような翻訳というよりは、翻案に近いものです。

次に、(二)に『パンチャタントラ』の構成として載せておりますが、①が一般的な構成で、五巻の書のタイトルにふさわしく、五つのテーマに沿って、一番目が友人の離反、この言葉は日本語訳から取っておりますが、原語ではミトラベータと言いまして、友人が離れることですが、友人同士を引き離す、策略を弄して引き離すことです。二、友人の獲得、三、烏と梟の戦い。原題は単に「烏と梟」なんですが、烏と梟がいかに戦争状態に入り、また、いかに講和をするかという、戦争と和平という国家運営にとって重要なテーマです。四番目、獲得したものの喪失。五番、思慮なき行為というのが、この五つのテーマです。

国家運営と今言いましたが、では、『パンチャタントラ』って何のために書かれたのか。これに関しては、『子どもパンチャタントラ』の一番目の話にその概略が載っています。ここでは全部を読みませんが、ざっくりと申し上げますと、ある国に王様がいて、その王様には三人子どもがおりました。王子様ですが、この王子が困ったことに箸にも棒にもかからないお馬鹿ちゃんで、教科書を読ませようとしても、集中力はないわ、読んでも理解できないわで、どうにもならない。困った王様は大臣に愚痴るんですけども、その大臣の中の一人が「王様、いい人がいるん

ですけれども、その人のところにやりませんか」と。ヴィシュヌシャルマという学者のところに弟子として預ければ、きつと馬鹿王子たちも将来王様になれる器になるだろうと言うのです。

王様はそのヴィシュヌシャルマに王子三人を預けましたが、ヴィシュヌシャルマさん、まさかここまでの馬鹿だったとは思わなかったようで、まともに教科書を使ってどうにかなるレベルではない。彼が取った方策というのが、物語を使って——どんな子どもでも物語好きですよ——、物語を使って王者として政権を執るにふさわしい知識、知恵、言い換えれば、処世の知恵を身に付けさせるということにしたんです。そして、それが六カ月のうちに果たされ、王様は大喜びしたというくだりが書かれております。ですから伝説的な作者としてはヴィシュヌシャルマなんです。さすが、本当にヴィシュヌシャルマが筆者だとしたら、自分でそんなことを書くでしょうかという疑問が浮かびます。これはあくまで伝説的な著者であろうと一般的には考えられています。

さて、ここでようやく本題に戻れるのですけれども、予稿集の一頁目に戻っていただけますでしょうか。この『パンチャタントラ』は前々世紀、十九世紀からヨーロッパ、特にドイツの学者たちの興味を引いておりました、『パンチャタントラ』だけでなく、当時のヨーロッパの人たちはインドの物語の豊富さにたまげておりました。全ての世界中の物語の起源はインドにあるとまで言っちゃう人もいたくらいで、もちろん、そんなことはないのですけれども、にわかにはインドに対する関心が高まった頃です。そこで、その頃より西洋の学者、研究者たちが『パンチャタントラ』に関心を抱き、特に二十世紀にはそのオリジナルな姿を求める学者がアメリカに出てまいりました。

インドでは児童書として扱われていたために、『パンチャタントラ』の名前を知らない人はいないくらいです。本当にインド人は誰もが『パンチャタントラ』を知っていると行って過言ではないのですが、にもかかわらず、書かれ

た言語はサンスクリットであるということもあるのでしょう、子ども向けに書かれたものでない『パンチャタントラ』を読んだことのある大人のインド人はほんの少数ではないかと思えます。

そのように子ども向けのみがよく知られている『パンチャタントラ』ですが、実際に子どもが目にする『パンチャタントラ』は一通りではないはずです。いろいろな人がいろいろなふうによりライトしているはずで、今回の発表では、北インドで入手したものと南インドで入手したもの二つを取り上げて、その構成と内容がどうなっているのか、どんなふうにも子どもに伝えているのかということに焦点を当てたいと思っています。

全部はとも取り上げる時間がありませんので、一つだけお話を取り上げます。そのお話といえますのは、日本でも「くらげ骨なし」、あるいは「猿の生き肝」と言えば、どちらか皆さんお聞きになったことがあるのではないのでしょうか。民話としても定着しているあのお話、「猿の生き肝」です。この話、もちろん、『パンチャタントラ』が日本に伝わってきたわけではないはずで、日本に伝わってきたとするならば、それは仏教経由であって、実際、お釈迦様の前生話である『ジャータカ』には二つの話が伝わっております。

二番目に、『子どもパンチャタントラ』の構成を、ざっくりと書いております。二つの資料がありますが、一言で言いますと、どちらも元の『パンチャタントラ』の構成を踏襲しておりません。(注…一般的な『パンチャタントラ』伝本では)五巻それぞれにテーマに沿ったお話があって、そのお話の中の登場人物が相手を説得するために何かお話をすると、という形で進んでいきます。このように「話の中で相手に別の話をする」という形式は、日本の皆さんであれば、恐らく『千一夜物語』でおなじみかと思えます。最近のところでは、井上ひさしが『イソップ株式会社』という話を読売新聞に連載をしていました。杵物語という形式です。

その枠物語形式は全く取り入れられていない。枠を取り払って、主話は主話だけ、中の挟まっている話——挿話と言いますが——挿話は挿話だけ、それぞれ別個に独立したものとしてリライトしている。これが、『子どもパンチャタントラ』の形式的な特徴です。

以下、資料の（一）にそれぞれの収録作品一覧がありますが、共通して入っているのが猿と鰐の話です。それぞれの話の構成としては、資料二のほうは単にお話があつて終わりですけれども、資料一のほう、南インドで買った本のほうは、それぞれの話の最後に寓意が付してあります。この点のみ、ちょっとだけ元々の『パンチャタントラ』に近いところで、動物寓話というだけあつて、それぞれ全て寓意が付いています。つまり、自分の言いたいことがあつて、相手を説得するために話をするのです。ですから、それぞれの話をなぜ自分がするのか、どういう意味なのかというのを登場人物は全て、『パンチャタントラ』では話しているのです。

これからする猿と鰐の話も、内容が全然分らないと話が進みませんので、資料の終わりのほう、補遺二・二、資料一・二をご覧ください。資料一のほうを中心に読み上げつつ、トピックと言いますか、重要な点を言ってみようと思います。

「あり得ない友情」というタイトルです。ある遠い国の川の近くに森林がありました。（物語の舞台は川の近くです。）その林には果物の木がたくさんありました。中には、かしいで、流れる川の上に届きそうなものもありました。その中に大きなリンゴの木がありました（リンゴの実というのがまたポイントです。果物はこの話ではリンゴです）。その大きな枝々に一匹の猿が住みついていました。その猿はほとんどの時間を林の中をうろついて費やしていましたが、いつもそのリンゴの木に登っていました。甘くておいしいリンゴの実はその猿にとって日々の食物だった

んです。

ある日の午後、川から声が聞こえてきて驚いたとき、その猿は、リンゴを食べるのに忙しくしていると申しました。その声の主は巨大な鰐でした。猿はそれまで鰐を見たことがなかったので、その鰐を見て驚きました。鰐が猿に尋ねました。「どこへ行ったら食べ物が入るか、教えてください。長時間泳いでいましたが、見つかりませんでした。とつてもおながすいているんです。」猿は鰐を気の毒に思っていました。「このリンゴを一つ食べたらいかがい？」そう言って、猿はリンゴを鰐のほうへと投げました。ものすごく空腹だった鰐は、すぐさまがつきました。鰐はその果物が大層気に入り、もつとくれと猿に頼みました。たくさんリンゴを気前よくやってから猿は、鰐にどこに住んでいるのか尋ねました。鰐が答えて言うには、「僕はここから遠い所に住んでいます。でも、食べ物を探してこの川を泳ぐんです。僕がこつち側のほうに来たのはこれが初めてです。僕がまた明日以降戻ってきたら、もつとリンゴをいただけませんか」。猿はしばらく考えました。リンゴはこんなにあります。リンゴを分かち合うのは他に誰もいません。そこで猿は、鰐にリンゴをあげると同意しました。

その翌日、鰐が姿を現しました。猿は約束をまっとうし、リンゴをいくつか鰐のほうへ投げました。鰐はその林について猿と話しながら、しばらく留まりました。鰐は次の日にまた来ると約束しました。猿は毎日鰐を待ち始めました。じきにその二人は——二匹の動物ですけれども——、親しい友達になりました。

猿はその林に独りぼっちでした（猿というのは群れをつくる動物です。ですから独りぼっちなのは理由があるはずなのですが、この子ども向けのライト版ではその理由は一切書かれていません）。鰐は猿がいい仲間だと分かりました。このようにして二人は毎日一緒に食べておしゃべりしました。猿はその木から離れることはなく、鰐は水から

出てきませんでした。

ある日、自分の生活について話し合っていたとき、鰐は自分には妻がいると述べました。猿はそのことを知って嬉しく思いました。その日、鰐が立ち去るとき、猿は奥さん用にと幾つか余分にリングゴをあげたんです。鰐の妻は猿とリングゴのことをよく聞かされていました。妻は、どうやって夫が猿と友達になったのか、興味津々でした。鰐がリングゴを持っていくと、妻はそれを味わい、どれほど美味しいのかを実感しました。妻は夫に、自分用に毎日リングゴを持つてくるように要求しました（奥さんのほうが偉いみたいです）。鰐は、妻でさえ、そのリングゴが気に入ったんだからと、そのことを嬉しく思いました。このようにして毎日鰐は猿がいる場所に泳いでいって、猿とおしゃべりし、妻のためにリングゴを持ち帰りました。

ひと月が過ぎると、鰐と猿は深い友情を築きました。鰐は自分たち二人がその日にしゃべったことを家に帰ると妻に聞かせるということが続きました（鰐は毎日、時間のほとんどを猿と一緒に過ごすようになります。すると奥さんはどう思いますかね）。鰐の妻は、もうこれ以上我慢できないわという状態になりました。猿に対して嫉妬と憎しみの感情を抱いたんです。妻は、夫が猿のもとへ行くのをやめさせようと、あれやこれやとあらゆる手段を講じました。とうとう鰐は妻に、「何が問題なんだよ、おまえ」という具合に詰めたんです。すると彼女は（この女はずるいんです）、自分の妬みを素直に言うことはせずに、誤魔化してこんなふうに言います。「私、猿が鰐と友達になれるなんて思いませんのよ。猿は木に住むもの、私たちは水に住むものですわ。あなたたち二人の間にどうして真の友情があり得るでしょうか。そんなはずないじゃない。猿があなたと友達になるっていうのは、何か下心があるんじゃないの」と言い出したんです。しかし、夫のほうは妻の心配を軽くあしらっていました。「なあ、おまえ、分かつ

ちやいないんだよ。僕たちはお互いとっても違っているかもしれない。でも、僕たちの友情は真の無私無欲の友情なんだよ。いたずらに心配するのはおやめ。」

しかし、これが火に油を注ぐことになりました。妻は一層ひどく腹を立て、二人の友情を何とかして終わらせようと考えました。あんな甘いリングゴを何年も食べ続けているお猿さんはきっとおいしいよね、と思いはじめたんです。ある日、鰐の妻は猿を招待するようにと夫に言います。あまりしつこく言うものですから、察しのいい夫の鰐は妻の魂胆を見破りまして、妻は困ってしまいます。それでも妻は諦めません。何とか別の手段を講じようとして、ある日仮病を使い出したんです。仮病だと気付かない夫は、本気で妻の体のことを心配します。ある日、鰐が帰ってみると、妻が寝込んで大変苦しそうな様子です。「おまえ、どうしたんだい」と夫が尋ねると、妻は、「あなた、私、あんまり具合が悪くてお医者さまを呼んだのよ。そうしたらお医者さま、もう駄目だって。私、もうすぐ死ぬわ」と、よよよと泣き出しました。妻の演技にだまされた夫のほうは、「何か手だてはないのかい」と。すると妻は、「お医者さまがおっしゃるには、猿の心臓を食べれば治るそうよ」。それを聞いた鰐は窮地に立たされることになりました。つまり、病気の妻を取れば、自分の親友を見捨てることになる。また、親友との友情を取れば、妻を見捨てることになる。さあ、どうしたものか。悩んだあげく、鰐が取ったのは妻でした。そして猿を殺す決意をしていつもの場所に戻ります。

次の日、鰐は猿を妻のもとへ連れてくると約束しました。それを聞いて妻は大喜びです。そして鰐は猿の所に行きまして、自分の家に猿を招待するふりをしました。猿は招待の話聞いて大喜びしました。何も知らない猿は、鰐の隠された意図に気が付かなかったんです。そして猿は鰐の背に乗って、鰐の家に向かって行った——はずでした。

しかし、途中で異変が起きます。鰐が突然泳ぐのをやめて、ゆっくり水の中に沈み始めたんです。猿、びっくりで

す。泳げませんから。慌てて猿が言います。「ちよつとちよつと待って。僕、泳げない。知っているよね。何で沈んでいるの。それ以上沈んだら僕、溺れちゃうじゃない。」それを聞いて、鰐は（馬鹿なんですね。どうもインドでは一般に水に住む生き物はあまり賢くないというイメージがあるようで、魚はどうしようもなく馬鹿ですが、鰐も策略を弄するけども、肝心のところは抜けています）、ここで鰐は本当のことを言っちゃうんです。

私の発表は『古事記』と何の関係もないのですけれども、「因幡の白うさぎ」があと一歩というところで本当のことを言っちゃって、肝心の目的を果たせなかったのと、全く同じことが起こります。つまり、鰐はここで言っちゃったがために、自分より賢い猿に裏をかかれることになります。

猿はそこで機転を利かせます。猿ははるかに賢く、頭の回転も速かった。とっさに思いついたのは――。「鰐くん、鰐くん、僕、言わなかったっけ。僕、心臓はあの木の所に置いてきたんだよね。だって危ないじゃない、心臓。何かあったら大変でしょ。」それを信じてしまった鰐は、「よし、分かった。じゃあ、戻るわ」と言って、猿を再び元の木の所に連れて行ってあげます。

さあ、元の木に戻った猿は一目散に木に駆け上がって、「ああ、よかった」と、九死に一生を得ました。でも、鰐は馬鹿なので、「ちよつとちよつと、猿さん、心臓どうなったの」。まだ気が付かないんです。猿は、「あんた馬鹿じゃないの」と言わんばかりに、「心臓が二つある者がどこにいるかいな。心臓は自分の体の中にあるに決まっているじゃないか。外に心臓なんてあるわけないでしょ！」

ということ、せつかく猿をだませたと思ったのに、鰐は果たせなかったんです。

この話の一番最後、教訓のところを見てください。話の寓意「相手が誰であっても、決して信じ切ってはならな

い。」皆さん、子どもにこれを教えますか？　すごいですよ。後半はまだ分かります。「困難のさなかにあっても、決して平常心を失ってはならない。」これはその通りなんですけども、小さい子どもに言うことですかね。これを子どもに教えるというのはいかなるものかと現代日本の私たちは思うわけですが、これを処世の知恵という『パンチャタントラ』の本来の目的に帰ってみれば、まさにその通り。実際、『パンチャタントラ』の中では、王者の処世の知恵ですので、策略大いに結構、というよりも、インドの伝統文化の中で、策略という言葉に悪いイメージは全くないので。自分の目的をまっとうできるのであれば、相手を騙して何が悪い。

神話ではありませんし、伝説でもありませんが、いわゆる古典、作者も年代も分からないという点では、神話、伝説にかなり近い『パンチャタントラ』という教訓の書をオリジナルな（リライトしていない）姿で読んだ人が非常に少ない、という点でも、『古事記』と似ているのではないか。より詳しくは予稿集を読んでいただければと思います。最が、せっかく二つの作品を持ってきたのに、もう一つのほうを紹介する時間がありませんが、違う点があります。最後に一つだけ申し上げますと、その木の実、今読んだ作品の中ではリングゴとして出てきましたが、もう一つの作品ではなぜかサクランボです。サクランボって（注…種があつて）食べにくいのに、何でだろうと思うんですけども、多分インドの子どもたちが好きな食べ物、果物としてぱっと思いつかべるものを採用したんじゃないかなと思います。

ちなみに、古典作品の『パンチャタントラ』伝本では、どちらでもありません。インドのイチジク、日本のイチジクよりももつとわーっとクラスター、集団になって、なっているような小っちゃいイチジクの実がほとんどです。多分オリジナルもイチジクの実でしょう。というのは、アラビア語でもやはりイチジクになっているからです。ただし、小本といわれる北インドを中心としてインド全般によく広まっている版ではそうではなくて、日本ではウドンゲ

として知られる——ウドウンバラと言うんですけども——ウドンゲの実、日本でもあるんですけども、フトモモだそうです。

以上で発表を終わります。どうもありがとうございました。